
暗闇の世界に消えていく

柿桑裕樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇の世界に消えていく

【Nコード】

N72050

【作者名】

柿桑裕樹

【あらすじ】

僕は昔よく来ていた裏路地に座り込む

そこは街の明かりが届かない暗い裏路地。

電柱に付いている外灯は古びて壊れているのか、今にも消えそうに瞬いている。

顔を上げて辺りを見渡しても人影は僕以外、何も見当たらない。昔からこの場所を知っているけれど、ここを通る人なんてほとんど居ない。僕が例え一日中此処に居たとしても、僕の姿を目撃する人は五人未満だろう。その位、誰も通らない。僕が知っている中で此処ほど人氣が無い所は無い。

だから、孤独を、一人でいる事を好んでいた僕はこの裏路地を気に入っていた。

時刻は午前二時。

僕は電柱に背中を預け、膝を抱き抱える様にして座っていた。

季節はもうすぐ冬に入る十一月半ば。少しずつ寒くなってくるこの季節、所謂冬は僕が一番好きな時期である。

と言うのも、僕はじめじめと嫌な感じの汗が吹き出る暑い夏よりも、肌寒く身が引き締まる思いをする冬の方が好きなのだ。暑い日より寒い方が良い、汗をかきやすい体質だから暑いのは苦手だ、などと云った簡単な理由もあるけれど、大きな理由は別にある。

それは冬の夜空がとても綺麗に輝いている様に感じるからだ。

夏の夜空は熱さの所為なのか湿度が高い所為なのか分からないけれど、少しばかり霞んでいる様に見える。それに比べ冬の夜空は、冷たく澄んでいて光が濃く鮮明に映る。だけれど、どこかすぐ消えてしまいそうな儚さを感じるのだ。

その力強く、儚い光がとても好きだった。

視線を空へと向ける。

生憎、今日の空は雲に覆われていた。分厚い雲ではないのか、空を見渡してみれば遠くの方にある雲と雲の隙間から星の光が微かに漏れてはいた。漏れてはいたけれど、明らかな曇り空だった。誰だってそうだろうけど、もしかすると僕の勝手な思い込みかもしれないが、やはり満天の星空でないと、あまり感慨を得ることは出来ないものだ。さらに言えば僕は曇りなんて云う、中途半端な天気は気に入らない性分なのだ。雨を降らしたいのならば降らせれば良いのに我慢しているような天気は好きではなかった。

ただ灰色に色塗られた空。何をしたいのかも分からず、人の感情をもグレーにする。だから嫌いなんだ。

でも、今はこの天気が気分的にあっている。

少しだけため息をつき、僕は膝に顔をうずめてじっと固まる。立ち上がる気力なんてモノは此処に来た時から存在していなかった。

耳を澄ましてみると、時折表通りを走っている車の音ぐらいしか聞こえてこない。もちろん人が歩いている音なんて聞こえないし、羽虫が羽ばたいている音も無い。

もうこの時期には虫があまり居ないのだろうか。僕はそんなに虫についての知識がある訳ではないから、この季節に虫がどんな風に生きているなんて事知りはない。もしかしたら、羽音が聞こえないだけであって、僕のすぐ近くで息を潜めるように居るのかもしれない。それとも地を這っているだけなのかもしれない。

だけど、これだけは断言できる。きっとどこかで生きているんだろう。虫は案外、生命力が強い生き物なんだ。

そう、人間よりも遥かに強く生きている。

しかし、暗く静かになるといろいろと物思いに更ける事が出来るものだ。今だって、普段は考えもしないような虫についてあれやこ

れやと考え込んでいた。顔を埋めているから視界は真つ暗だし、物音は殆ど無いと言って良い。そんな寂しい世界に居ると、人は内向的になるのかもしれない。プラスよりはマイナス思考になっていくとは思っていたのだが、こんな風に物思いに更けるとは考えてもみなかった。

いや、本当はどうでも良いような事を考えたいだけなのかもしれない。受け入れたくない現実から目を背けていただけ。辛い事実から背を向け逃げ出したいが為にひたすら別の事を思考する。そう。所謂、現実逃避。そんな事をしても無駄なだけなのに。だけど、今だけはあの事だけは絶対に考えたく無かった。あの事は僕の心を根こそぎ抉り取ったのだ。だから、昔からのお気に入りだったこの場所に来て。考えたく無い事を考え無いようにする為にくだらないモノを思案して。僕はじつと静かにうずくまっているのだ。

なんて、つまらない人間。いや、正確には駄目な人間か。

どのくらいの間、考えても意味の無い、とてもくだらない事を思案していただろうか。

不意に、ポツリと冷たい何かが手の甲に当たった。

顔を上へ向けると、いくつもの水滴が頬に当たる。最初は何か感触れる程度に、そして次第に当たるといふ感触が分かるほど強く。頬を、髪を、体を濡らしていくそれは 雨。

雨が降ってくる先を覗こうと思いい目を凝らすが見えない。在るのは黒色。それに小さな街灯の明かりに照らされ反射している雨粒だけ。元々星の光を遮っていた雲の所為で漆黑だった空が、さらにその闇を濃くしている様だった。周りを見渡してみるとそこは漆黒の世界。僕の周りは殆ど暗闇だ。壊れかけている電灯の頼りない光だけが僕の周りにある唯一の光だった。

まさか、雨が降ってくるとは思っていなかった。今日の昼くらいに観た天気予報の降水確率は二割未満だった筈なのに、見事に裏切ってくれた。予報という物は、なかなか当てにはならないものみたいだ。

少しだけため息を吐いて僕はゆっくりと立ち上がる。そして空を仰ぎ、電柱に寄りかかる。

だんだんと強く降ってくる雨。何もない、静かだったこの世界は雨音がぶち壊した。今では強弱する雨によって辺りの音は支配されている。

僕は雨に当たらない場所に移動する事も、服などを使って雨を防ぐような事も何一つしなかった。服がずぶ濡れになり、じめじめとした嫌な感触が僕の体中を侵食しつくしていく。このままじっとしていたら、絶対に風邪を引くだろう。僕はそこまで体が強くないし、この間まで入院していたから、もしかしたらとても酷い風邪になるかもしれない。下手をしたら入院生活が更に長引くだろう。

だけど僕は何もなかった。ただ電柱に寄りかかり、目に雨粒が入るのにも拘わらず暗雲を見上げていた。

ああ。僕は一体、何をしているんだ。何がしたいんだ。

僕がいくら風雨に打たれようとも。
僕がいくら酷い風邪を引こうとも。
僕がいくら苦しい目に会おうとも。
僕がいくら暗愁の念を抱こうとも。
僕がいくら世界に望んだとしても。

この世界は何も変わらないのに。

当たり前だけど、世界には僕一人だけがいるわけではない。人間

は六十億人居て、動物はそれ以上の数が住んでいて、数え切れない程の様々な生き物が生きている。彼らは皆、何かを求めて、何かを望みながら生きている。

そんな世界の中で、僕一人だけの願いが叶う何て事は、海に落ちた一本の髪の毛を見付ける事が出来るくらいの可能性すら秘めてはいないに決まっている。だからと言って、世界は決して平等ではなく、いろんな格差がある。植物は虫に喰われ虫は動物に食べられる。動物の中でも襲うモノ襲われるモノがいる。そう、弱肉強食の世界だ。

人間だって身体能力が優れている人も居れば、体の一部が無い人も居る。何でもすらすらと覚えられる人も居たり、喋れない人も居たりする。衣食住に困らない人もいれば、明日の朝日を拝む事が出来ないくらい貧しい人もいる。

何に生まれるか、どんな風な環境に生まれるかは全て世界の運命に定められていて。

悲惨な運命から逃れる事が出来るのは、極一部。みな全部は救われない。いや、もしかすると救うことが出来ないだけかもしれない。だけれども。

報われたモノは皆、報われるような事をしたのだ。そう、何か行動を起こさなければ、何も始まらない。世界は望むだけのモノに対しては冷たいんだ。

これが僕が考えている世界の在り方。僕にとっての世界はこんな感じだった。

そして。

僕は望むだけしかない、救われない人間だった。

畜生。

僕は何も努力をしなかった。全て流れのままに、世界が定めた運命とやらに立ち向かおうともせずボンヤリと生きていた。例えるのなら、風にただ運ばれる雪の様に、川を流れる木の葉の様に。そんな風に見に降り懸かる災難に対して何も抵抗しなかった、ただの弱者。いや、一生懸命生きているモノ達からみたら、ただの愚か者だろう。

畜生。

だから、僕が報われないのは分かっているんだ。流れに逆らおうとしなかった人間が、自分の望みを叶えるなんて傲った行為だ。そして僕はそれを知っているから高望みはしない。別に僕自身の状態に文句がある訳でもないから、不満も有りはしない。

畜生っ。

だけど、彼女は？ 普通の人よりも十倍以上も努力をし、地反吐を吐きながらもその身に課せられた運命に抗ってきた。見ていた僕の方が倒れてしまいそんな事をした。そして、やっとその定めから逃れた筈だったんだ。

畜生っ！

なのに何故、何一つ報われなかったんだ？　楽しいと言っていた
日常に戻る事はおるか、生きる事すら出来ないだなんて。あまりに
も、酷くないか。

神様は、そんなに彼女を死なせたかったのか？

「なんでなんだよぉ！」

僕は泣きそうな声で叫んだ。空へ、宇宙へ、世界へ、神様に向か
って力の限り叫んだ。僕の叫びは裏路地に響き渡り、辺りは盛大に
震えた。明らかに近所迷惑な行為だけれども、この辺りに住んでい
る人なんて居ないし、そんな事は気にしない。僕はただ答えが知り
たかった。

でも、返事なんてものは来やしない。世界はいつだって無口で残
酷なんだ。

そして、僕はあまりにもちっぽけな存在だった。

木霊していた僕の叫びが雨によって掻き消され、僕は膝を折って
倒れる。足元には既に水溜りが出来ていてズボンは泥まみれになっ
た。雨の所為で体は芯から冷えきっている。だけど、そんな事が気
に障ることが無くなる位に僕の心は打ち砕かれていた。

彼女は僕にとって最初の友人であり、最高の先生であり、大切な
人だった。僕は彼女に様々な恩を受けていた。僕を孤独と言う名の
闇から連れ出してくれた。臆病な僕に人を信じる事、人との付き合
い方を教えてくれた。外で他人と遊んだ事がなかった僕に、体を使
って遊ぶ事の楽しさを体験させてくれた。

彼女には、沢山のモノを貰っていたんだ。

でも、僕は彼女に対して何も出来なかった。恩を返す事も。感謝する事も。そして、彼女を助ける事も。何も出来なかった。

今の僕は人間では無い、そう、彼女が居なくなった僕は生命ではない存在となった。それは慟哭しているだけの、人形。生きている様に見えるだけで中身は無い只の抜け殻。

そうさ、僕はもう消えていくんだ。

ああ。

なんて惨めなんだろうか

僕は、暗闇の中に消えていく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7205o/>

暗闇の世界に消えていく

2010年11月5日03時32分発行